

平成8年度

唐古・鍵遺跡

第60次発掘調査概報

1997

田原本町教育委員会

例 言

1. 本書は田原本町教育委員会が平成8年度に「緊急地方道路整備事業八尾24号線他10路線」に伴う事前調査として実施した、奈良県磯城郡田原本町大字唐古及び鍵に所在する唐古・鍵遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査は以下のとおりの関係者で行った。

田原本町教育委員会	教育長	岩井	光男
	教育次長	池田	照美
文化財保存課	課長	仲	弘司
	課長補佐	鎌田	資
	調査係長	藤田	三郎
	課員	上柿	容子(庶務)
	技師	豆谷	和之(現地調査・11月6日～11月12日)
	技師	清水	琢哉(現地調査・11月13日～12月26日)
3. 発掘調査の作業及び補助、並びに整理作業にあたっては以下の参加者を得た。

足立高子、小栗典子、川畑元美、黒木円香、斎藤有美(奈良大学)
末広真理子、中谷利枝、早川伊津子、東山喜一(天理大学)
藤本智子、八木健一郎(奈良大学)、
4. 本文中に使用している弥生土器の編年は、藤田三郎・松本洋明1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年(近畿編Ⅰ)』(木耳社)に従った。
5. 石器の観察については、北村博義氏に御教示を賜った。記して感謝します。
6. 本概報の執筆・編集は清水があたった。

本文目次

I. はじめに	1
II. 発掘調査の成果	
1. 堆積土層	4
2. 検出された遺構(第1トレンチ)	5
3. 検出された遺構(第2トレンチ)	17
4. 出土した遺物	18
III. まとめ	29

I. はじめに

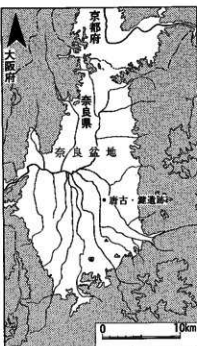
唐古・鍵遺跡は奈良盆地のほぼ中央に位置する弥生時代の代表的な環濠集落である。標高47～48mの沖積地に立地し、現在初瀬川と寺川に挟まれた微高地上に立地する。

これまでの調査の結果、唐古・鍵遺跡は遺跡面積30ヘクタールの弥生時代最大規模の環濠集落であることが判明している。この遺跡からは、青銅器鋳造関連遺物やヒスイ勾玉などの重要遺物が数多く発見されている。絵画土器の出土点数は全国随一で、中でも楼閣を描いた土器片はこれまでの弥生時代観を覆す重要な発見となった。

本書で報告する第60次調査は、緊急地方道路整備事業に伴う事前調査として実施したものである。今回の調査地は唐古・鍵遺跡北東部に位置し、周辺では第25次・27次・28次・59次調査が行われている。第25次調査では弥生時代前期の大溝が、第27次・28次調査では弥生時代中期～布留期の環濠が数条検出されている。これらの調査の成果から、今回の調査地周辺は遺跡北東部の環濠帯に該当することが想定されていた。

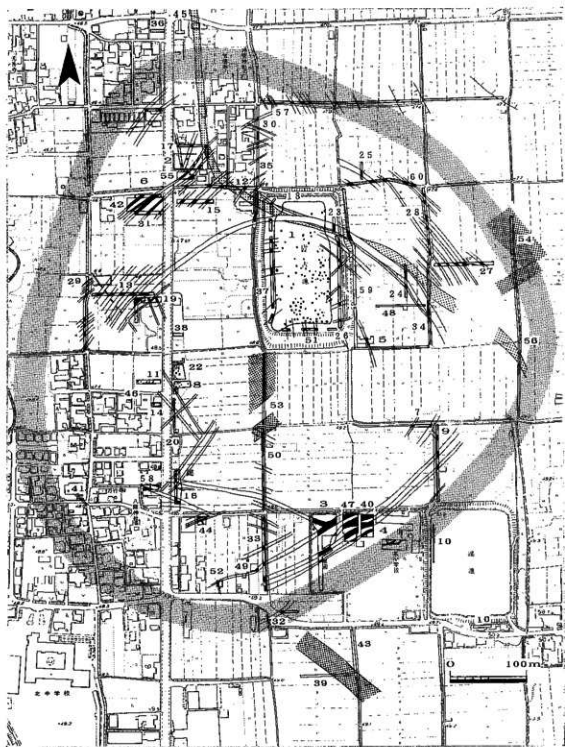
調査の対象となる地区は東西150mにわたる。その間には南北方向の農道があり、その通行を妨げないために東半と西半の二つの調査区に分けて調査を実施することとなった。11月6日より西側90mを第1トレンチとして調査し、第1トレンチ終了後の12月16日から東側部分60mを第2トレンチとして調査した。

調査は、中世素掘溝が検出される暗褐色土上面までの深さ約0.5mをバックホーにより掘削し、以下は人力により弥生から中世の遺構を調査した。



第1図 唐古・鍵遺跡の位置

調査次数	所在地	原因	地目	土地所有者	現地調査期間	調査面積
第60次	唐古127-2 ほか	道路建設	農道 水田	町有地	1996.11. 6 ～12.26	509㎡



第2図 唐古・縄遺跡の範囲と調査地点 (S=1/5000)



第3図 第60次調査地点周辺遺構配置図 (S=1/2000)

調査日誌抄

- | | | | |
|--------|--|------------|--------------------------------|
| 11月6日 | 第1トレンチ調査開始 重機により表土掘削、トレンチ壁面づくり | 11月29日 | 前期遺構掘り下げ |
| 11月11日 | 表土掘削ほぼ終了、中世遺構検出 午後降雨中止 | 12月2日 | SD-1201掘り下げ |
| 11月12日 | 座標移動、中世遺構検出、杭打ち | 12月4日 | 第1トレンチ完掘・全景写真 |
| 11月16日 | 中世末掘溝完掘・全景写真・弥生遺構検出 | 12月6日～9日 | 実測・サンプル採取 |
| 11月18日 | 布留期の大溝掘り下げ、第1トレンチ東半の河川状の遺構(後に溝に変更)掘り下げ | 12月10日～13日 | 第1トレンチ埋め戻し |
| 11月26日 | 弥生中期環濠掘り下げ | 12月16日 | 第2トレンチ調査開始 重機により表土掘削、トレンチ壁面づくり |
| | | 12月18日 | 遺構検出・全景写真 |
| | | 12月20日 | 第2トレンチ完掘・全景写真 |
| | | 12月21日 | 実測 |
| | | 12月24日～26日 | 埋め戻し・水田復旧 |

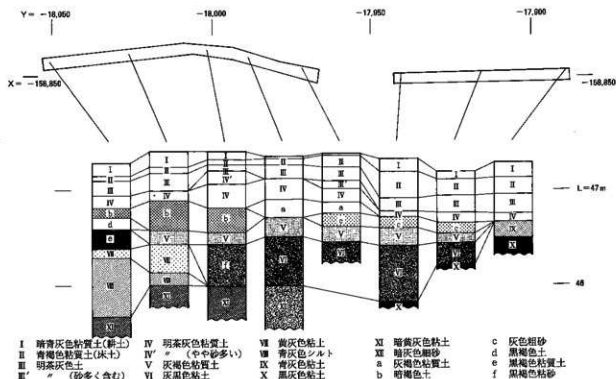
II. 発掘調査の成果

1. 堆積土層

調査地の現状は農道ならびに水田であった。第1トレンチは、幅4m、長さ約90mで東西に長い。そのため、基本層序は西半と東半とで大きく異なる。西半では、I層が暗青灰色粘質土（水田耕作土）で約0.1m、II層が青褐色粘質土（向床土）で約0.05m、III層が茶灰色土で約0.25m、IV層が茶灰色粘質土で約0.1m堆積する。b層が暗褐色土で約0.1m、d層が黒褐色土で約0.2m、VII層が黒褐色粘質土で約0.2m堆積する。VII層はベースの黄灰色粘土である。中世の遺構は一部でIV層から掘削されている。また、弥生時代後期の遺構はb層の上面から、弥生時代中期の遺構はd・e層から、弥生時代前期の遺構はVII層から掘削されている。

一方、第1トレンチ東半では、基本的にはI～IV層までは西半と変わらないが、その下がc層の灰色粗砂層となっている。その下がV層の灰褐色粘土、VI層の黒灰色粘土となっている。中世の遺構がIV層上面で、弥生時代中期の遺構がV層上面で検出されている。

第2トレンチの層序は、基本的には第1トレンチ東半の層序と同じである。第2トレンチI～IV層が第1トレンチI層～IV層にほぼ対応している。その下には、第2トレンチのほぼ全体に厚さ0.1mの灰色粗砂層（c層）が広がるが、これは第1トレンチ東端で確認された砂層と一連のものと思われる。その下には厚さ0.1mの灰褐色粘質土層（V層）、厚さ0.15mの黒褐色粘土（VI層）、厚さ0.2mの暗灰褐色粘土層（VII層）、青灰色粘土層（IX層）がみられる。遺物を包含するのはV層までであるが、VI層下面には始良・丹沢火山灰の可能性のある火山灰がみられた。2次堆積と思われる。調査は、c層上面まで重機により掘削して行った。



第4図 第60次調査基本土層関連図

2. 検出された遺構（第1トレンチ）

弥生時代前期の遺構

SD-1201 第1トレンチ中央西側で検出された、幅約3m、深さ約1.3mの北北西-南南東方向の大溝である。北側の第25次調査で検出されたSD-201と同一の遺構とみられる。遺物より、弥生時代前期と考えられる。

SD-1202 第1トレンチ西半で検出された、幅3m、深さ0.6mの北北西-南南東方向の溝である。遺物が出土していないため、明確な時期は決定できない。

SD-1111 第1トレンチ中央で検出された、推定幅3m、深さ0.5mの北西-南東方向の溝である。東肩がSD-1105Bに切られる。遺物が少ないため明確な時期決定はできないが、堆積層序から弥生時代前期～中期前半となる可能性がある。

SK-1201 第1トレンチ西端で検出された、深さ1mの方形の土坑である。全体の規模は、SD-1103に切られているため明らかにできなかったが、その形態から木器貯蔵穴と考えられる。埋土は青灰色シルトと黒灰色粘砂のブロック土であり、人為的な埋没が想定される。遺物は、弥生時代前期の土器、太型刃刈石斧を叩き石に転用したもの、加工木がある。

前期～中期包含層 第1トレンチの西側部分（SD-1202以西）には黄灰色粘土の比較的安定したベースがみられた。その上には弥生時代前期末～中期初頭の遺物を含む黒褐色粘質土・黒褐色上の包含層が堆積する。この範囲ではピットも検出されており、前期段階の居住区となっていたことがわかる。

弥生時代中期の遺構

SD-1103B 第1トレンチ西端で検出された、幅3m、深さ0.9mの北西-南東方向の大溝である。植物層が厚く堆積するが、遺物は少ない。弥生時代中期ごろの土器片が出土している。

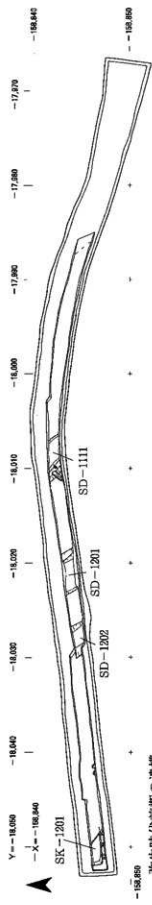
SD-1104 第1トレンチ西側で検出された、幅1.5m、深さ0.4mの北西-南東方向の溝である。弥生時代中期とみられる土器片が少量出土している。

SD-1105B 第1トレンチ中央で検出された、幅3.8m、深さ0.8mの北西-南東方向の大溝である。下層は植物層が厚く堆積する。遺物は少ないが、弥生時代中期後半とみられる土器片が出土している。

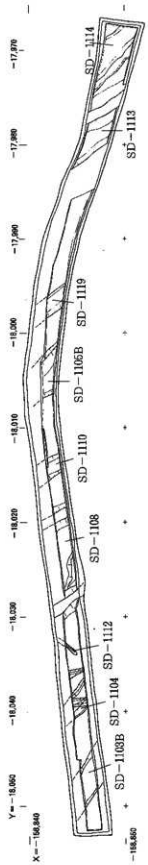
SD-1113 第1トレンチ東側で検出された、幅2.9m、深さ0.3mの北西-南東方向の溝状遺構である。埋土が粗砂の洪水堆積であり、第28次調査のSD-106とは一連の遺構になると考えられる。遺物は少ないが、層序から弥生時代中期の遺構と考えられる。

SD-1114 第1トレンチ東端で検出された、推定幅5m、深さ0.35mの北西-南東方向の溝状遺構である。SD-1113の東側に隣接する。粗砂による埋没はSD-1113と共通しており、同時埋没の可能性もある。第28次調査のSD-107とは一連の遺構になると考えられる。

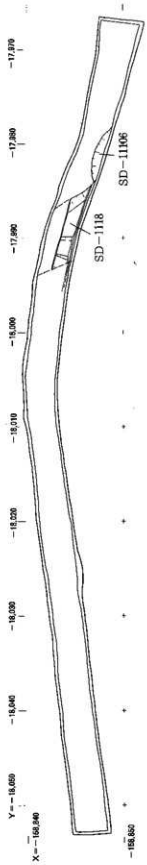
SD-1119 SD-1118の西側に隣接する、深さ1mの北西-南東方向の溝状遺構である。東肩がSD-1117に切られているため、溝の幅は不明である。遺物は極めて少ない。遺構の時期も不明であるが、第27次調査のSD-103と一連の遺構とすれば、弥生時代中期ごろに比定することができよう。



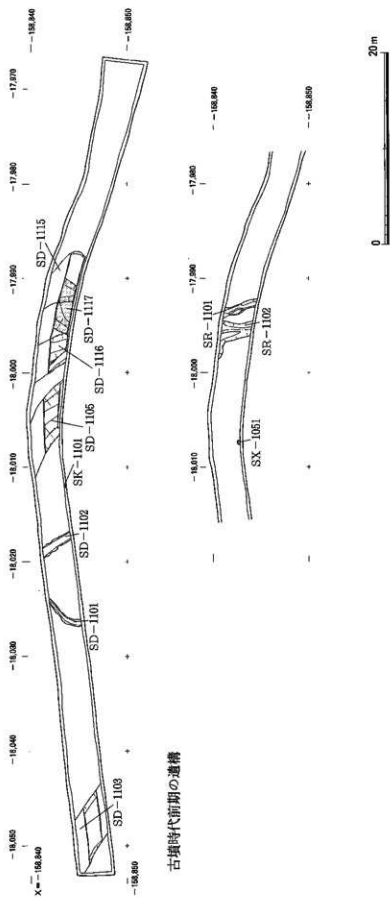
弥生時代前期の遺構



弥生時代中期の遺構



弥生時代後期の遺構



古墳時代前期の遺構

古墳時代後期以降の遺構

第5図 第1トレンチ遺構平面図 (S=1/400)

第2表 第60次調査主要溝・河道一覧表

溝番号	規模 (m)		溝底 標高	走行 方向	弥 生						庄 布 留			備 考		
	幅	深さ			I	II	III	IV	V	VI	内	古	新		Se	Se
SD-1201	約3.0	1.3	45.2	北北西-南南東	**											第25次 SD-201に対応
SD-1202	3.2	1.1	45.8	北北西-南南東	-----											
SD-1101	0.06	0.2	46.7	北東-南西							**					小溝
SD-1102	1.1	0.2	46.7	北北西-南南東							**					小溝
SD-1103	①3.9	1.2	45.4	北西-南東												
	②4.9	0.7	46.0								**					再掘削
SD-1104	1.0	0.4	46.2	北西-南東	-----											
SD-1105	①3.6	0.9	45.6	北西-南東	-----											
	②3.8	0.8	46.1								**					再掘削、27次 SD-105に対応
SD-1106	-	-	-	西北西-東南東	-----											
SD-1108	約6.5	0.5	46.3	北北西-南南東												浅い落ち込み
SD-1110	2.0	0.7	46.1	北北西-南南東	-----											
SD-1111	3.1	0.7	45.9	北西-南東	-----											
SD-1112	0.4	0.2	46.2	北東-南西					**							小溝
SD-1113	2.8	0.5	46.2	北西-南東												28次 SD-106と対応
SD-1114	-	0.5	46.2	北西-南東	-----											28次 SD-107と対応
SD-1115	約6.0	0.2	46.5	南北方向												浅い帯状
SD-1116	2.9	0.4	46.4	北北西-南南東												浅い帯状
SD-1117	約6.9	0.6	45.9	北東-南西							----					木製法(竊、蟹など)出土
SD-1118	-	1.2	45.5	北西-南東						**						27次 SD-102と対応か
SD-1119	-	0.9	45.8	北西-南東	-----											27次 SD-103と対応か
SR-1101	0.8	0.2	46.7	北北西-南南東										**		27次河道Ⅰと対応
SR-1102	2.6	0.2	46.6	北北西-南南東									**			27次河道Ⅱと対応

*実線+矢印で示した範囲は遺構が開口していた時期を示す。点線で示した範囲は遺物等の特徴が希薄ながらその期間のいずれかに遺構が存在したことを示す。



写真1 作業風景



写真2 調査前（西より）



写真3 第1トレンチ遺構検出状況（東より）

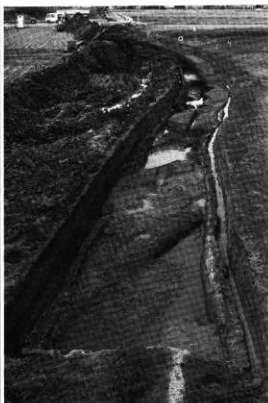


写真4 第1トレンチ遺構完備状況（東より）

弥生時代後期の遺構

SD-1106 SD-1118の東に隣接して検出された溝状遺構で、北側の一部が調査区南端内にかかっていた。弧状に屈曲する。また、西側はSD-1118に切られている。遺物は少なく、時期決定の根拠に欠けるが、SD-1113を切ることから、弥生時代中期後半～後期の遺構とみられる。

SD-1118 第1トレンチ東半で検出された、深さ1.3mの北西-南東方向の溝状遺構である。西側がSD-1117に切られているため、溝の幅は不明である。上層で半完形の甕などが出土している。遺物より、弥生時代後期と考えられるが、上に重複するSD-1115の下層から庄内式土器片が数点出土しており、SD-1118の最終埋没は庄内期まで下る可能性がある。

弥生時代末～古墳時代前期の遺構

SD-1101 第1トレンチ中央西側で検出された、幅約0.6m、深さ0.25mの溝である。北東方向に湾曲する。布留期の遺構とみられる。

SD-1102 第1トレンチ中央付近で検出された、幅0.9m、深さ0.15mの北北西方向の溝である。布留期の遺構とみられる。

SD-1103 SD-1103Bを再掘削した、幅4m、深さ0.6mの溝である。布留期の二重口縁壺などが出土している。

SD-1105 SD-1105Bを再掘削した、幅3.6m、深さ0.7mの溝である。布留期の小形丸底壺などが出土した。

SD-1115 古墳時代後期の河道SR-1101の東側部分にみられた、北西-南東方向の浅い溝である。幅5.3m、深さ0.2m。青灰色シルトを中心に堆積する。布留期の土器片が出土した。

SD-1116 SR-1102の西側部分にみられた、北西-南東方向の浅い溝状遺構である。幅2.9m、深さ0.1m。青褐色シルトを中心に堆積する。遺物が少ないため明確な時期は不明であるが、遺構の切り合い関係から、SD-1115と同様古墳時代前期段階の遺構と考えられる。

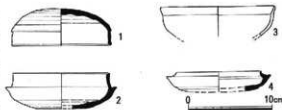


写真5 弥生時代の堀溝 (SD-1105の東より)

SD-1117 SD-1115、1116により切られる、北東-南西方向の溝状遺構である。幅5m、深さ0.9m。埋土は青灰色微砂・灰色細砂が中心で、下層では植物が多く含まれている。遺物は、布留式土器のほか、刀の鞘、盤、一本冊などの木製品も出土している。

古墳時代中期～後期の遺構

SR-1101・1102 第1トレンチ中央西側で検出された、南北方向の自然河道である。ほぼ隣接する形で、古墳時代後期、古墳時代末の2時期にわたる堆積が確認されている。SR-1102は南南東-北北西方向の流路で、深さ0.4mをはかる。調査区北端付近で西側に広がる。東肩がSR-1101により切られているため幅は不明である。5世紀後半(TK47)の須恵器などが出土している(第6図1、2)。第27次調査の河道IIに対応する。SR-1101はSR-1102の東肩に形成された流路である。幅0.8m、深さ0.3mの堆積となっている。6世紀後半(TK206)の須恵器蓋環などが出土した(第6図3、4)。第27次調査の河道Iに対応する。



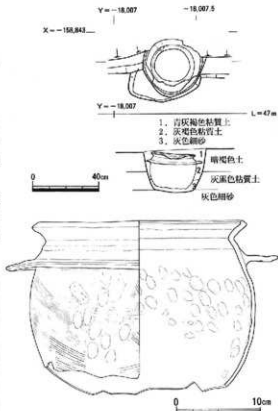
第6図 SR-1101・1102出土土器(S=1/4)

中世・近世の遺構

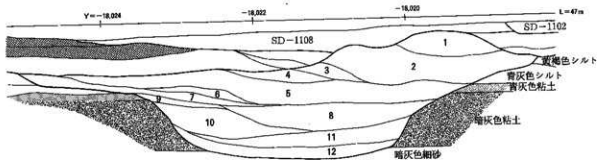
中近世小溝群 灰褐色粘質土で埋没する東西方向の小溝が多数検出されている。瓦器碗等の破片が出土している。また、調査地に存在した道に近い方向の小溝も検出されているが、埋土は中世のものとは異なり、茶灰色粘質土で埋没する。遺物にも近世陶磁器等が含まれている。SX-1051 第1トレンチ中央南端で検出した土坑である。直径0.4m、深さ0.37mで、底部を打ち欠いた羽釜が埋設されていた(第7図)。



写真6 SX-1051 出土羽釜

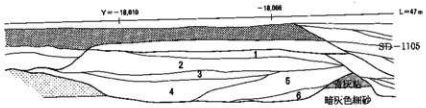


第7図 SX-1051遺物出土状況図及び土器実測図



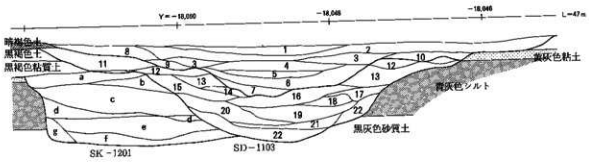
SD-1201 北壁土層断面図

- | | | |
|-----------|-----------------|------------|
| 1. 暗黄灰色粗砂 | 7. 暗灰色粘砂 | 最上層: 1~2 |
| 2. 黄灰色粗砂 | 8. 灰色粗砂 | 上層: 3~4 |
| 3. 青灰色微砂 | 9. 灰色細砂 | 中層: 5~7 |
| 4. 青灰色粘土 | 10. 暗灰色粘砂 (細砂質) | 下層: 8~10 |
| 5. 暗灰色粘砂 | 11. 暗灰色粘土 | 最下層: 11~12 |
| 6. 灰色細砂 | 12. 黒灰色粘土 | |



SD-1111 北壁土層断面図

- | | |
|-----------|----------|
| 1. 暗灰色細砂 | 4. 黒灰色粘土 |
| 2. 黒褐色砂質土 | 5. 黒色粘砂 |
| 3. 黒色粘砂 | 6. 黒灰色粘砂 |

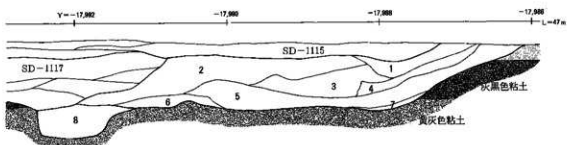


SK-1201・SD-1103北壁土層断面図

- | | | | |
|------------|-----------|------------------|----------------|
| S K-1201 | S D-1103 | 9. 灰黒色砂質土 | 17. 暗灰色粘質土 |
| a. 暗黄褐色砂質土 | 1. 黄灰色粘質土 | 10. 暗灰褐色粘質土 | 18. 灰黒色粘土 |
| b. 灰黒色砂質土 | 2. 暗褐色土 | 11. 黒褐色土 | 19. 黒色粘土 |
| c. 灰黒色粘土 | 3. 灰黒色粘質土 | 12. 暗黄褐色土 | 20. 灰黒色粘土 |
| d. 灰黒色粘質土 | 4. 灰黒色粘土 | 13. 暗灰色粘砂 | 21. 黒色粘土 (植物層) |
| e. 青灰色粘土 | 5. 黒色粘土 | 14. 灰黒色粘土 | 22. 灰黒色粘土 |
| f. 灰褐色細砂 | 6. 黒色粘土 | 15. 黒色粘土 | |
| g. 灰黒色細砂 | 7. 黒色粘質土 | 16. 暗灰色粘質土 (植物層) | |
| | 8. 黒褐色土 | | |

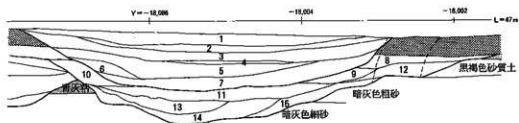


第8図 遺構層序(1) (S=1/50)



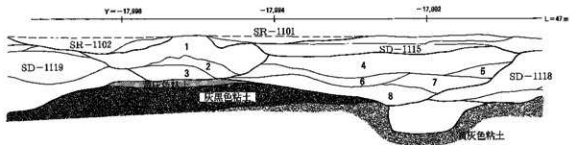
SD-1117 北壁土層断面図

- | | |
|--------------|----------|
| 1. 暗青灰色粘質シルト | 5. 黄灰色粗砂 |
| 2. 黄灰色粗砂 | 6. 灰黑色粘土 |
| 3. 灰色粗砂 | 7. 黒褐色粘土 |
| 4. 暗灰色粘質土 | 8. 暗灰色粗砂 |



SD-1105 北壁土層断面図

- | | | | |
|----------------|-----------|-----------------|---------|
| 1. 灰褐色粘質土 | 6. 青灰色粘土 | 11. 暗褐色粘質土(植物層) | 上層: 1 |
| 2. 暗灰色粘質土 | 7. 暗青灰色粘土 | 12. 黒褐色粘砂 | 中層: 2~3 |
| 3. 灰褐色粘質土 | 8. 暗灰褐色粘砂 | 13. 黒灰色粘砂 | 下層: 4~6 |
| 4. 暗灰色粘土(炭混じり) | 9. 黒灰色粘砂 | 14. 黒色粘砂 | 最下層: 7 |
| 5. 暗灰色粘土 | 10. 黒灰色粘砂 | 15. 暗灰色粗砂 | |



SD-1117 北壁土層断面図

- | | | |
|-----------|---------------|---------|
| 1. 灰青灰色粘土 | 5. 暗灰色シルト | 上層: 1~4 |
| 2. 青灰色粘土 | 6. 暗灰色粘砂(酸砂質) | 中層: 5~6 |
| 3. 黒灰色粘砂 | 7. 灰青灰色粘砂 | 下層: 7~8 |
| 4. 灰色粗砂 | 8. 灰色粗砂 | |



第9図 遺構層序(2) (S=1/50)



写真7 SD-1201
完掘状況（南より）



写真8 SD-1202
完掘状況（南より）



写真9 SK-1201
完掘状況（西より）

写真10 SK-1301
遺物出土状況



写真11 SD-1103
完備状況 (南より)



写真12 SD-1106
完備状況 (南より)





写真13 SD-1118,119
完掘状況(東南より)



写真14 SD-1101(右)
SD-1102(左)
完掘状況(北より)

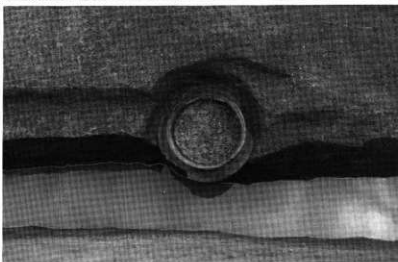


写真15 SK-1051
遺物出土状況
(南より)

3. 検出された遺構（第2トレンチ）

SX-2201 調査地全体が一連の落ち込み状遺構内であった。最上層は弥生時代前期の遺物を含む灰褐色粘土層で、以下の黒灰色粘土層、暗灰褐色粘土層には遺物は含まれていない。また、トレンチ西端で底を確認したところ、最下層には始良・丹沢火山灰層の可能性を含む火山灰層が検出された。深さは、検出面より0.75mであった。また、この微低地は第1トレンチ東半にも広がっていた。

SD-2101 SR-2101とSR-2102の間で検出された、幅0.56m・深さ0.2mの南北方向の溝である。遺物より、古墳時代後期～飛鳥時代ごろと考えられる。

SD-2102 幅0.5m、長さ1.6m、深さ0.1mの西北西-東北東方向の溝状遺構である。深さは0.1mをはかる。灰色粘土により埋没している。遺物が出土していないため時期は不明である。

SR-2101 第2トレンチ西半で検出された、南北方向の流路である。遺物が出土していないため詳細な時期は不明である。

SR-2102 SR-2101の西側に堆積する砂層を一つの遺構として捉え、SR-2102とした。砂層下には人の足跡等がみられることから、沼地状の微低地であったと考えられる。第1トレンチの砂層堆積とは一連と考えられることから、弥生時代中期以降の堆積となる可能性がある。

SK-2001・SK-2002 SK-2001は1.8×1.2mの長方形の土坑である。検出面からの深さは約0.3mである。SK-2002は2.2m×2mの方形の土坑である。検出面からの深さは約0.4mである。これら2つの土坑は、深さも大差なく、いずれもブロック状の黄灰色粘土等で埋没していることから、同様の目的で掘削された遺構であると考えられる。水田の境界に掘削されていることから、野井戸の可能性はある。

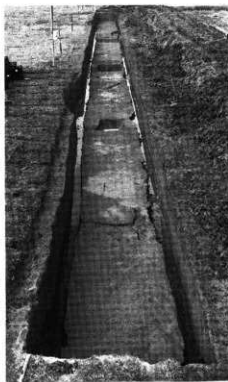
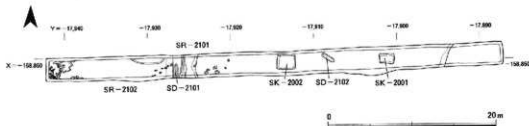


写真16 第2トレンチ遺構完掘状況（東より）



第10図 第2トレンチ遺構平面図 (S=1/400)

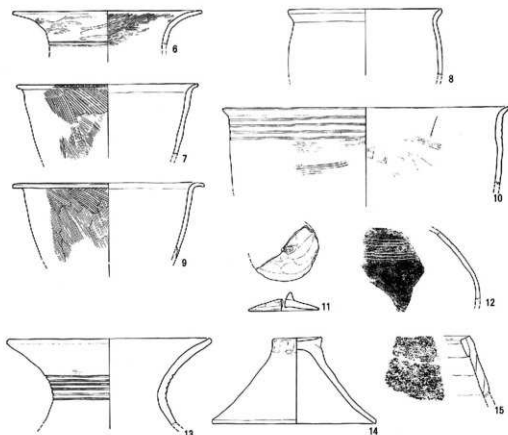
4. 出土した遺物

(1) 土器 (第11・12図、写真17~19)

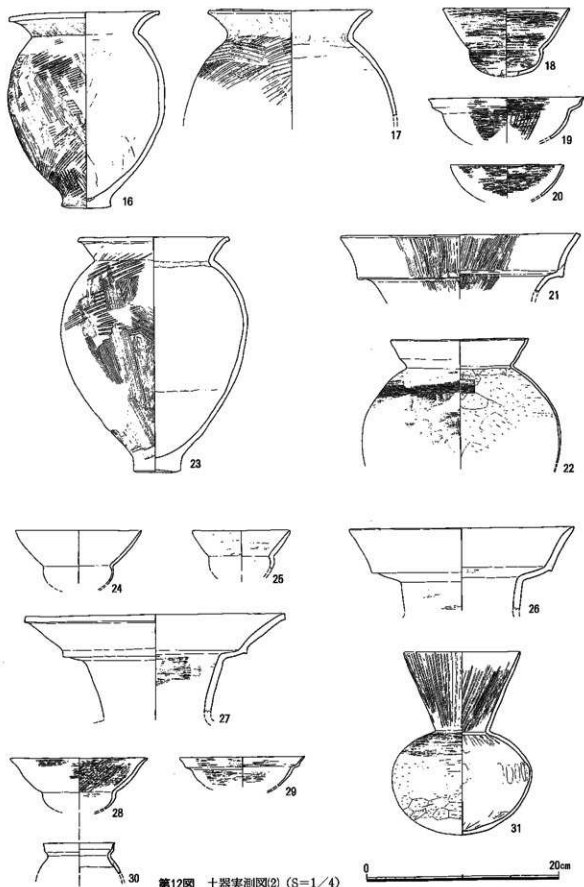
SD-1201出土土器 6は最下層下位出土の壺の口縁部である。ヘラ描き直線文が頸部に施される。7は最下層出土の甕で、体部をハケで仕上げ、口縁には刻み目を施す。8・9は下層出土の甕で、8は体部をナデで仕上げ、9は体部をハケで仕上げる。10は中層出土の鉢で、ヘラ描き沈線文を4条施す。これらの遺物は、大和第I-2様式に位置づけられる。

SK-1201出土土器 11は壺の蓋である。穴が中央にあり、その隣りにつまみ状の突起を貼り付けている。残存が1/2程度であるため突起が2つであったのか3つであったのかは不明である。12は壺の肩部破片である。3条ずつのヘラ描き沈線が2段にわたって施される。

前期~中期包含層出土土器 第1トレンチ西側にみられた黒褐色土~黒褐色粘質土中の出土遺物である。13は壺で、河内からの搬入品である。頸部に6条のヘラ描き沈線を施している。14は壺の蓋で、内面先端部にはススが附着している。15は東海地方の内傾口縁土器である。外面は条痕がなくナデ調整を行う。砂粒を多く含み、色調は淡灰黄色を呈する。



第11図 土器実測図(1) (S=1/4)



第12图 土器实测图(2) (S=1/4)

SD-1118出土土器 16は半完形で出土した甕で、体部はタタキのあとハケで調整している。17も同様の甕であるが、タタキの条線が16より幅広い。大和第VI-2～3様式の遺物である。

SD-1117出土土器 18～20は中層出土の精製土器である。18は小形丸底壺で、内外面ともに細かい横方向のヘラ磨きで仕上げる。19は有段口縁鉢で、内面には放射状のヘラ磨きがみられる。20は高杯の口縁部とみられる。横方向のヘラ磨きで仕上げている。21は二重口縁壺の口縁部である。内外面ともに縦方向のヘラ磨きが施されている。中層からの出土である。23は上層出土の布留式の甕である。器壁は内面ヘラ削りで薄く仕上げられており、体部外面はハケで仕上げられる。肩部に棒状の工具で二点の刺突を施しているが、これは布留式古段階にしばしばみられる列点文である。22は弥生時代後期の甕で、上層～下層に散乱する形で出土した。河内からの搬入品であり、重複する溝SD-1118から混入したものと考えられる。

SD-1101出土土器 図化できたのは小形丸底壺2点のみであった。24・25はいずれも器面が荒れており、残存が悪い。布留式古段階に位置づけられよう。

SD-1102出土土器 26は二重口縁の壺である。器面が非常に荒れているため、内外面の調整は不明である。布留式であろう。

SD-1103出土土器 27は最上層出土の二重口縁壺である。河内からの搬入品と考えられる。このほか、図示できなかったが布留式の甕口縁部小片などが出土している。

SD-1105出土土器 28～30は上層からの出土である。28は小形丸底壺で、精製品である。内面は、横方向のヘラ磨きの後放射状のヘラ磨きを行っている。写真18-32も同様のつくりの小形丸底壺である。29は有段口縁の鉢である。30は口縁に段をもつ小形壺と考えられる。外面が著しく磨滅しており、調整は不明である。写真18-33はS字口縁甕である。写真18-34は最上層出土の甕で、吉備系の可能性がある。

SK-1101出土土器 31はほぼ完形で出土した丸底の壺である。やや扁平な楕円形の胴部は、外面をヘラ削りで整えた後、横方向に細かいヘラ磨きを施している。逆円錐状の口縁部は縦方向のヘラ磨きを内外面に施している。

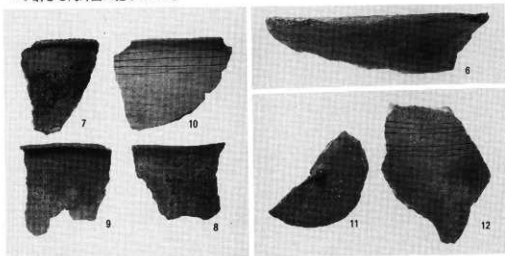


写真17 土器(1)

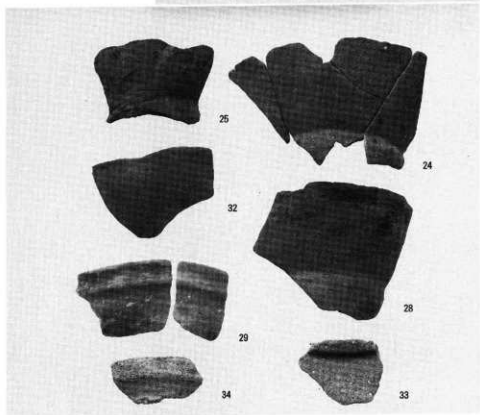
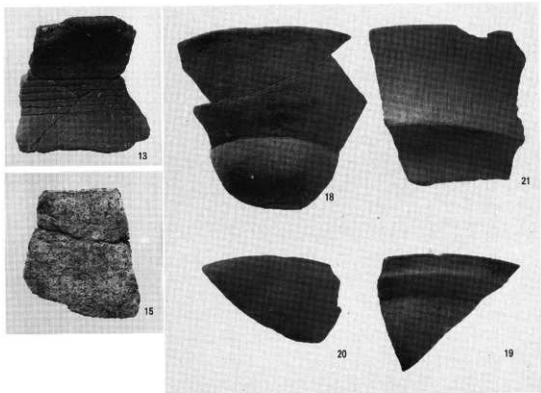


写真18 土器(2)

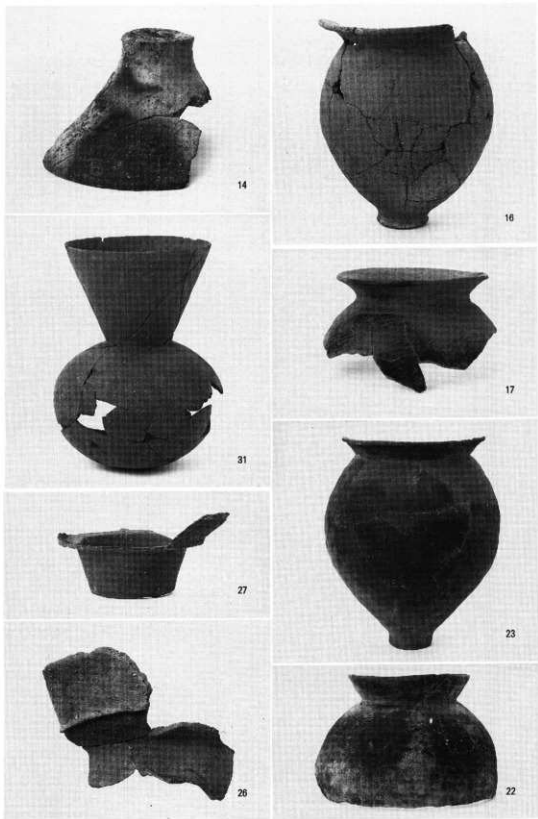


写真19 土器(3)

(2) 木器 (第13・14図、写真20・21)

鞘 1 はSD-1117第1層出土の木製鞘である。全長21.6cmであるが、片面の半分程度の残存であり、鞘の太さは不明である。鞘口・鞘尻に段をつくりだしてある。内側には浅いくりこみがあり、刀身の薄い鉄製の剣または刀子を収めるとみられる。

高杯 2 はSD-1103B第6層から出土した木器で、水平縁の高杯口縁部の可能性が高い。内外面とも丁寧に仕上げている。直径36cm程度になると考えられる。

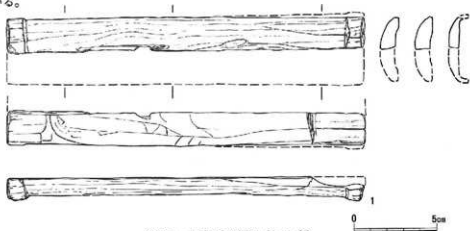
盤 5 はSD-1117第1層出土の盤である。同一個体とみられる2片が出土しているが、両者の位置関係は不明である。脚部の一部が残っているが形状は不明。

有柄鋤 3 はSD-1117第1層出土の一本鋤である。鋤先部分は大きく破損しており、本来の大きさは不明である。加工痕も明瞭には残っていない。

不明木製品 4 はSD-1117第1層出土の棒状木製品である。全長22.5cm。両面を削って先端を薄くしている。また、先端部の断面は菱形に近い形となっている。用途は不明。

棒状木製品 6 はSD-1117第1層出土の細長い棒状の製品である。残存長82.1cm。断面は蒲鉾形で、幅2cm、厚さ1.1。用途は不明。

建築材 7 はSD-1118第1層出土の建築材である。残存長91.2cmで、ほぞ穴状の加工が施されている。



第13図 木製品実測図(1) (S=1/2)

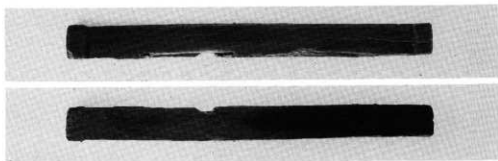
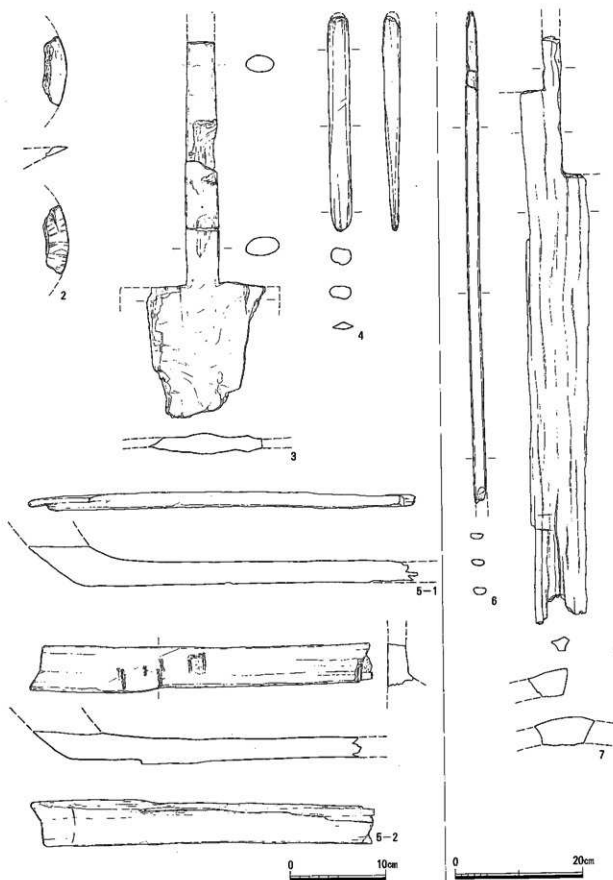


写真20 木製鞘



第14图 木製品実測图(2) (2~5: S=1/4, 6·7: S=1/6)

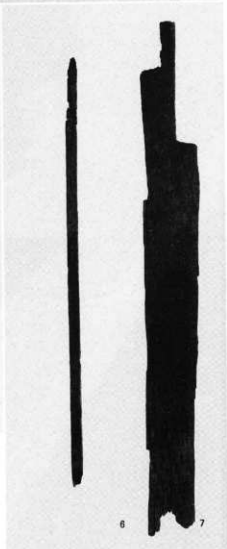
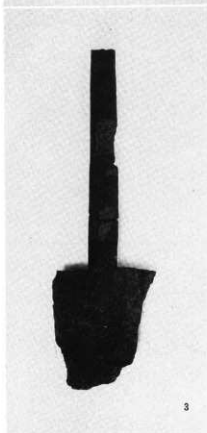
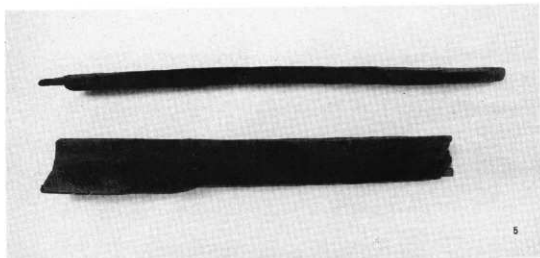
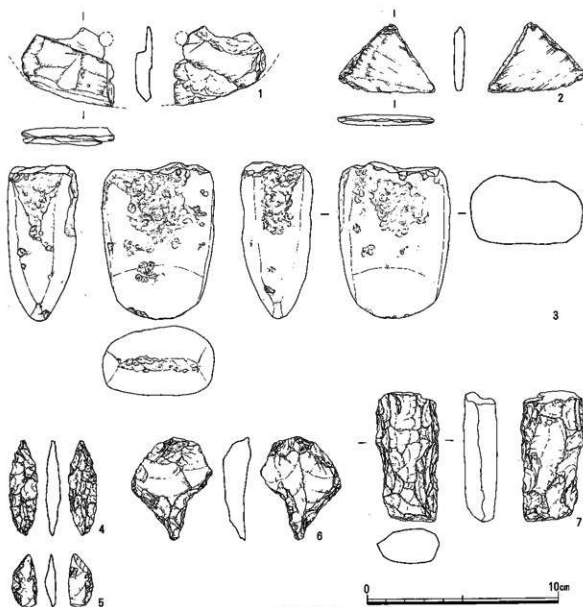


写真21 木製品

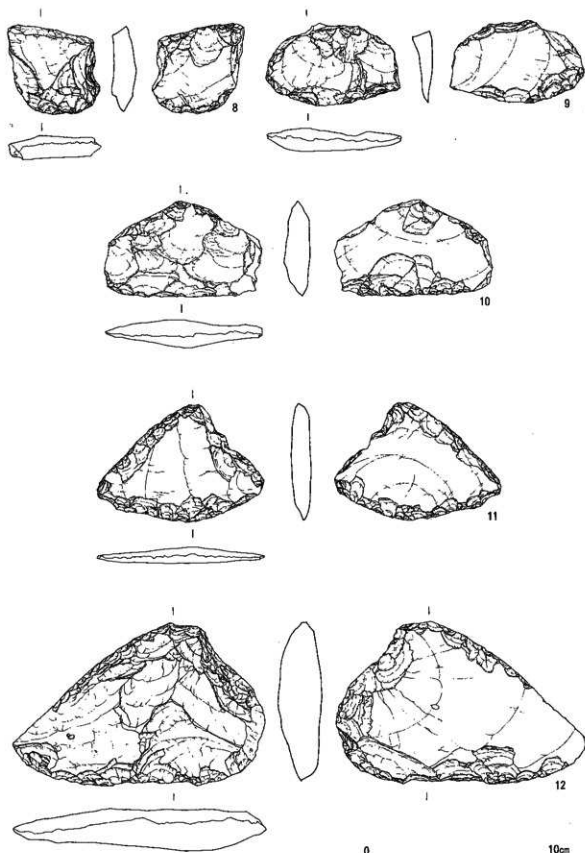
(3) 石器 (第15・16図、写真22)

磨製石器 1は流紋岩製の石包丁破片である。SD-1105出土で、混入の可能性が高い。2は結晶片岩製の石包丁で、SD-1108B出土である。3の磨製石斧は、欠損後に凹石・敲石として再利用している。表・裏・右・左の4面で敲打痕が明瞭に確認できる。SK-1201出土である。

打製石器 7は石剣の基部破片である。6は石錐である。使用により先端が磨滅している。4は柳葉形の石鏃である。5も石鏃の未成品とみられる。細部調整を行っている段階で廃棄したものであろう。4～7はサヌカイト製である。8～12はスクレーパーで、12は流紋岩製、他はサヌカイト製である。12は石包丁の未成品を転用したとみられる。なお、4・11はSD-1104から、5・6・8・10・12は前期～中期包含層から、7・9は包含層から出土した。



第15図 石器実測図 (S=1/2)



第16圖 石器実測図(2) (S=1/2)

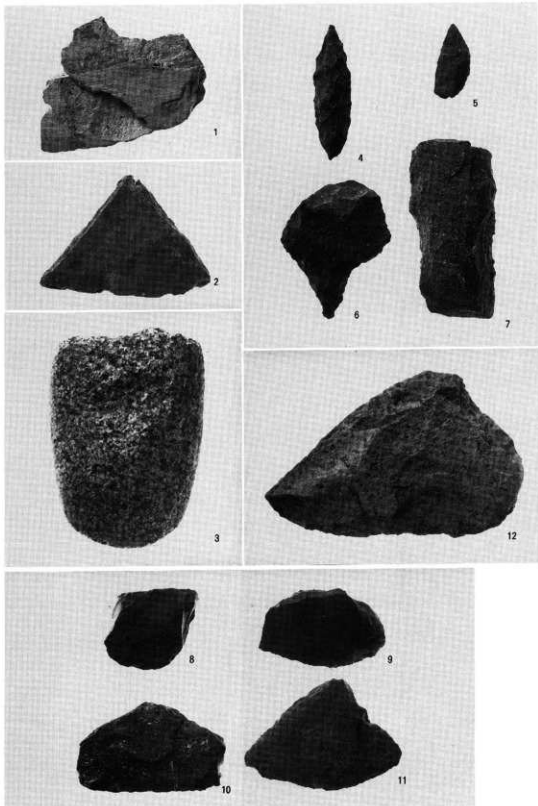


写真22

Ⅲ. まとめ

唐古・縄遺跡の調査もすでに60次を数えるに至った。この成果から、遺跡の範囲、集落の変遷などが明らかとなってきた。特に、居住域と環濠帯については、ほぼ範囲が明確になってきている。しかし、過去の調査の大半が水路工事を中心とした細長いトレンチ調査であり、面的な遺構の情報が不足している。今回の調査も東西に細長いため、面的に遺構を捉えることができたとは言いがたい。

1. 遺構について

弥生時代前期では、調査地西側で一定の集落遺構が分布していた。今回の調査で検出したSD-1201と25次調査で検出したSD-201は同一遺構とみられ、北西-南東方向の大溝として復元できる。なお、この溝の南東側の延長線上には第27次調査で検出したSD-201があり、あるいは一連の遺構となる可能性もある。この大溝の東側では前期の遺構は少なく、溝も小規模なものしかない。一方、大溝の西側には木器貯蔵穴、柱穴などがみられ、遺構面も黄灰色粘土層の安定したベースとなっている。このことから、この溝が前期唐古・鍵ムラの北東を区画していると考えるのが妥当であろう。なお、この溝で区画される居住域も、中期以降には大環濠の外側となり、環濠帯外縁部に相当することになる。前期と中期以降の集落範囲の変化については、周囲の環境の変化による可能性もあるが、3地区で分立していた集落が統合されたことにより居住範囲が変化したと考えることもできる。

弥生時代中期では、環濠5条をはじめとする溝状遺構がみられた。溝からの出土遺物が非常に少ないことから、生活域から比較的離れた位置にある環濠であることが考えられる。また、溝の埋土が第1トレンチ西半と東半とで大きく異なっており、調査地東側が粗砂による洪水堆積で、西半が粘質土による堆積となっていた。これは、埋没時期の違い、溝の性格の違い、地形的な違いなどが原因として挙げられる。第2トレンチでは全く環濠が検出されていないことから、粗砂で埋没する東側の2条の溝は環濠帯最東端の溝となるか、あってももう1条程度と考えられる。そして、第2トレンチより東側には、第56次調査等で検出された河道が存在するとみられることから、第1トレンチ東端の2条の溝は自然河道から直接流水を引き込むような形の水路状の溝で、第1トレンチ西半の溝は直接には自然河道の流水が入り込まない溝であったという解釈に最も妥当性を感じる。実際、大阪府池上・曾根遺跡では河道と環濠が直接合流していることが確認されている。いざれにしても、今回までの調査で溝と流路との関係を把握できたとはいえないため、結論は保留することにしたい。

弥生時代後期では、明瞭な遺構は環濠帯東端で1条の溝(SD-1118)が検出されるにとどまっている。古墳時代前期の溝で西側が破壊されているため、遺構の規模は不明であるが、第27次調査のSD-102、28次調査のSD-105とは一連の遺構となる可能性がある。布留期の再掘削をうけた環濠SD-1103B・SD-1105Bでは弥生時代中期の遺物が出土したのみである。弥生時代後期にも開口していた可能性は残るが、本調査地周辺は弥生時代後期には積極的な土地利用が行われていなかった可能性が高い。

布留期では、第1トレンチ全体で溝や土坑が検出されている。SD-1115~1117は布留段階の

溝状遺構である。溝方向がそれぞれ異なるため別遺構名をつけているが、重複する位置にあることから一連の堆積の可能性もある。SD-1117の堆積は砂層を中心としており、洪水により埋没した可能性もある。ただし、布留期の溝としては最も東の端に位置するため、先述の弥生中期溝のように自然河道の流水を直接的に受け入れていたため砂層を中心とする堆積となった可能性もある。

SD-1103とSD-1105は、弥生中期の環濠跡を布留期になってから再掘削したものと考えられる。このような再掘削が集落全体で行われたのかどうかはまだ充分明らかとなっていないが、これまでの調査では集落北東部の第27次調査のほか、集落西部の第13・42次調査や集落南部の第3・40・47次調査でも弥生時代中～後期の環濠の再掘削が確認されている。再掘削が行われた原因は不明であるが、奈良盆地における布留期の集落の動向を考える上でも興味深い。奈良盆地に所在する弥生時代の拠点集落のうち、坪井・大福遺跡、平等坊・岩室遺跡では庄内期～布留期初頭まで環濠（少なくともその内の一部）を維持している。拠点集落以外でも、保津・宮古遺跡では小規模な環濠集落が布留期初頭に営まれる。このように、弥生時代を象徴する「環濠集落」という集落構造は布留期初頭においても一部で継続している。その意味については、今後の研究により明らかとしていく必要がある。

中世以降では、東西方向の素掘小溝群が調査地全面で検出された。このような状況は、調査地が中世以降現在に至るまで耕作地としての土地利用がなされてきたことを示すと考えられる。第1トレンチで検出された土坑には底部を大きく打ち欠いた羽釜が埋められていた。当初墓である可能性も考えられたが、底部が大きく打ち欠かれていること、埋上が墓とするには不自然であったことなどから、現段階では井戸の枠として転用されていた可能性が高いと考えている。

2. 遺物について

今回の調査で出土した遺物の大半が土器であり、そのほとんどが弥生時代前期と古墳時代前期の2時期で占められていた。

弥生時代前期では、搬入土器に東海地方の内傾口縁土器が含まれるほか、河内の胎土で製作された壺も出土している。ただし、包含屑からの出土であり、遺物の共伴関係を明確にすることはできなかった。

古墳時代前期の遺物は、SD-1117で布留1式の遺物がまともな状態でみられた。SD-1105からは吉備系・東海系とみられる甕の小片が出土しているが、特に搬入土器が多いという状況ではなかった。

報告書抄録

ふりがな	からこ かぎ いせき							
書名	唐古・鏡遺跡 第60次調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	田原本町埋蔵文化財調査概要							
シリーズ番号	15							
編著者名	清水琢哉							
編集機関	田原本町教育委員会							
所在地	〒636-03 奈良県磯城郡田原本町890-1							
発行年月日	西暦1997年3月28日							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
唐古・鏡	奈良県磯城郡 田原本町大字唐古	293636		34°34'04"	135°48'15"	19961106～ 19961226	509	道路建設
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
唐古・鏡	集落	弥生 古墳 中世	溝、河跡、土坑	弥生土器、土師器 須恵器、石器、木器		弥生時代～布留期の環濠		

田原本町埋藏文化財調査概要15

—唐古・鏡遺跡

第60次発掘調査概報—

平成9年3月28日

発行 田原本町教育委員会

印刷 明新印刷株式会社